

# 南イエメンを

## 訪ねて

企画経理部班 近藤節夫

近藤さんが、單身、四十二年暮から、約三週間に亘って、中東からアフリカを回り、南イエメンを訪問した。すでに、レバノン、ヨルダン、アラブ連合等の旅行記については、機関紙で紹介したが、これは、そのとき、最後に訪れた独立間もなかった南イエメン旅行記である。

独立間もないアラビア半島の南端、アデン（南イエメン人民共和国）に飛んだのは一月一日の朝だった。六七・一一・三〇を期して独

立の喜びにひたるアデンは、長い間のイギリスの支配から解放された喜びと、独立国だと言う得意気な一面が先ず感じられた。

私は入国前に、ヨルダン・アラブ連合以上に警戒が厳しいだろうことは覚悟していた。一九六三年以来の全市非常事態宣言が、昨暮漸やく解除されたばかりだったし反英テロの硝煙があとを引いていることは充分想像できた。北に境界を接するクーデター後のイエメンの状態も無気味だった。アンマンで、アデンにソ連が乗り出したと聞いて、私はカイロに着くや「エジプト・アン・ガゼット」紙に目を通した。イエメンは不隠だが、アデンについては特に目立った事件も無かったので実のところほっとした。ところが、私のビザは独立前に東京のイギリス大使館で入手したものが、その後に独立を勝ち得たアデンでは無効だということを耳にして、アデンに入る前に航空会社を通じて現地に照会したことから早くも前途多難を感じた。双発プロペラ機でアジスアベバ（エチオピア）からジブッティ（仏領ソマリランド）を経由アデン空港に降り立った時、あまりの警戒の厳重さになかばあきれ、また腹が立って来た。金網と有刺鉄線で外部と隔絶された一隅へ連れていかれ、そこで所持品メモに細かく記入した後、漸やく税関だった。それはともかく、係官の口調は正に得意気だった。分るような気がした。彼等自身の手で、力で独立を勝ち得たばかりなのだから。だが彼等はおしなべて親切だった。

ビザを取得した後私は安いホテルの幹旋を頼

むことも忘れなかった。紹介してもらった怪獣のようなゲジラ・パレスホテルへ向う車から見たアデンの町は地形から言っても一寸異様だ。インド洋から入り込んだアデン湾を南に、北面には岩山が曲りくねってずーっとついでくる。ほとんど緑らしいものは目に入らない。

私の目指すホテルは市の中心にあった。アンマンのホテルもそうだったが、ビルの一階では多くの商店がそれぞれに商をやっており二、三階がホテルに使われていた。

このホテルの若者アバス・ムッタナ君の話だと、独立以前三階は英国兵士用に四六時中、解放されていなければならず、アデンの住民は三階へ上ることすら許されていなかったと言う。彼が教えてくれたエリザベス女王の写真がはがされた白っぽい壁跡が、妙に気になった。私はこの三階の一室を朝食付で三日間三ポンド九シリング（約三三〇〇円）の契約で借りることにした。

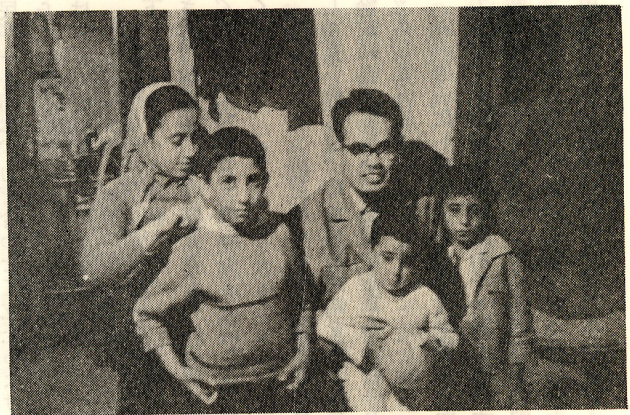
私はまずアデン市内の地図を作る必要があった。ホテルにはもちろん三軒の書店には地図すら売って無かったからだ、それというの小さな市内は市民には隅々まで分っていたし、観光客も訪れることのない今日のアデンではその必要もなかったからだ。そんな訳で、暑いこの市内を精力的に歩き回った。今日このアデンが急速に世界の脚光をあびるに至ったのは、頻繁な反英テロの勃発と、その過程の中で、アデンの民族主義者たちによってつくられたNLF（民族解放戦線）とFLOSY（占領下南イエメン



解放戦線)の二つの民族解放戦線の誕生、抗争そして独立へつながる行動形態が砂漠の風土とはうらはらに、極めてねばり強く、執着するイエメン人の積極的な性格を浮きぼりにしたことと対照的に、苦しいイギリスの今日の立場をそのまま象徴するかのごとく、一三〇年の支配から手を引くイギリスの態度が、あまりにあっさりしたものであったからだ。

一八六九年スエズ運河が完成して以来それまでアジアとアフリカを結ぶ単なる寄港地としての役割を果たしていたに過ぎないアデンが紅海から地中海を経て、ヨーロッパへ通じる貿易の中間地点としての役割を果たすことになった。その上アラビア半島に石油が採掘されるようになるとその積出港としてアデンの港は、益々その重要性を高め、東インド会社以来の支配力をもってイギリスは素晴らしい港を造り、アデンを完全に掌中のものとした。しかし、第二次大戦後の「新興国独立の嵐」はこの地でも例外ではなかった。岩山と砂漠ばかりでこれと言って産業を持たないこのアデンが、ほとんどイギリスの軍事基地に依存する基地経済とはいえないが、現地人(ほとんどイエメン人)とイギリス人居住区を完全に二分した上で徹底した圧政を布いてきたこれまでのイギリスのやり方は、明らかにイエメン人を無視したものであった。

イエメン人のイギリスに対する憎しみの感情は、通り一辺の憎しみを通りこしたもので、抑圧された被支配者としての一三〇年の歴史をさげ出す、本能的とも呼べるパッション(感



カイル君の弟妹と(ベイルト)

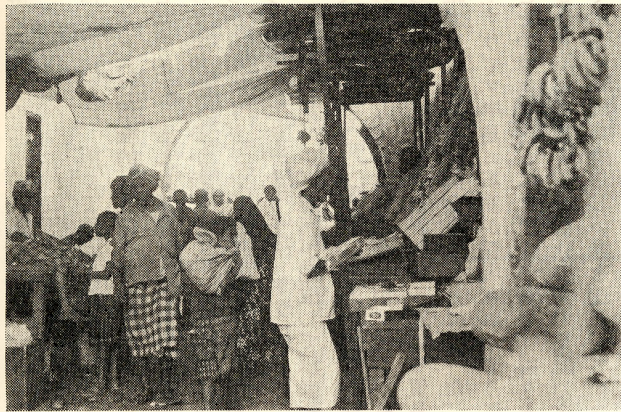
情)として身体全体でもってアンチ・ブリティッシュをたたきつけてくるのだ。

私はしばしば中国人と間違えられながらも、ある一人の警官は、香港における反英闘争をサポートすると言ったし、「イギリス人か?」と言ったものすごい形相で追ってきた未だ幼ない子供の目を忘れることは出来ない。それは、ムッタナ君にしてもそうだったし、私が知合ったアデンの人は全て反英の権化だった。

アデンは、一九六三年南アラビア近隣の一六土侯国を併せ、南アラビア連邦となったが、これとて反英闘争の火の手に抗しきれなくなった

イギリスが、保守的な土侯国を手なずけることによって連邦を、ひいてはアデンをイギリスの思いのままに動かそうとする謀略にすぎなかった。しかしながら所詮、イギリスのカイライである連邦政府は、アデンを支配する力もなく、この頃からアデンにおける反英闘争はテロという形でイギリス人を襲撃する様になった。年々そのテロは激化し、六七・二・一一のゼネストとそれに続く反英闘争で、六九人が死亡し、千人以上が負傷したと伝えられている。反英闘争を指導するのは、NLFとFLOSYの二つの民族解放戦線であったが、複雑なこの国の民族対立が、はしなくもこのような分裂を引起したと言えなくもない。南アラビア連邦の民族解放戦線として、イギリス軍当局に対して立ち上ったNLFに反して、FLOSYは、反英という点では共通するものを持っていたが、それ以上にアデン住民二八万のうち三分の一がイエメン人であり、彼等は北隣のイエメンと一体化さるべきだと主張し、又これはイエメンに軍事援助を続けているアラブ連合の考え方とも一致する。イエメン人に共感をおぼえるアデンの住民の間では、近來FLOSYの力のはるかにNLFを凌駕するものがあつた。しかしながら中東戦争敗北後、アラブ連合軍はイエメンから撤退し、自然FLOSYに対する援助も打ち切られ逆にNLFが勢力を盛り返した。こうした中で昨九月五日イギリスは有名無実化した連邦政府に代えて、NLFを人民代表と認めることにした。そしてイギリスは、私が訪れた一月一日





アデンの青果市場の入口

を期して南アラビア連邦の独立を承認することに決定していたが、今度はNLFとFLOSYの露骨な勢力争いが相まって連続的テロ事件を誘発し、急拠六七年一月三〇日にこの国の独立を認めることになり、NLFのアシヤービが大統領となった。

私が訪れた時、アデン市内の家という家には赤・白・黒のNLFの三色旗がひるがえり狭い路地には独立を祝う小旗が吊り飾られ、一応表面的にはFLOSYは後退した。だが、NLFと異なり、アデン人口の大半を占めるイエメン人の支持をうけたFLOSYは派手さこそない

が、住民の心の中に食い込んでいく。ムッタナ君も独立を素直に喜びながらも、おおっぴらにFLOSYを支持すると言った。不思議なのはどの家にもアシヤービ大統領の写真の上に、FLOSYを支持するナセル（アラブ連合）大統領の写真が掲げられていることだった。ナセル個人の人気はこれまでアラブ連合のFLOSYに対する強力な援助という点を計算に入れても、民族解放運動の先頭に立った自国の大統領をさしおいてナセルを崇めるこの奇妙な光景は、いったい何を意味するのだろうか。FLOSY支持者のうつぶんの発露と考えられないこともないが、私は、独立して間もないこの国にとって国民が一心同体、力を合わせて立上らなければならぬこの大事な時に、国内的に分裂の危機をはらんでいる点を心配するのだ。

英系商店だけでは主なく、重くトビラを下したままだ。市街戦の生々しい弾痕や、破壊された商店跡、有刺鉄線あるいは石塀に書きなぐられた「NLF」のマークがいやに目につく。

そしてアデン港とアデン商店街を結び見晴らしの良い峠には、今でも機関銃を構えた兵士が警戒に当たっており、通過する車を一台一台チェックしている。

だが幸いにしてアデンの町は平静さを取戻している。金曜日には商店街が一勢に休業する回教の風習にはとまどったが、普段の私の泊ったホテルから百米も離れていない一角に青天果物市場があり、冷かしと買物客でごったがえして



マーケット前の広場（アデン）

いる。その裏には魚市場があり、そのいずれにもハエの群がった割合豊富な「商品」を並べ、色浅黒い男達が威勢をつけていた。人々は皆陽気で底抜けに人がよい。

私はこの商業地区は二日間歩いて地図を作りあげ、岩山にも登って市内を展望した。大体これまで日本人で通ってきた私が、この地へ来てほとんど中国人扱いされ、私自身もつい「中共のジャーナリスト」と自称して歩いていたのだが、この人混みの中である男に毛沢東の肖像画の前へ連れていかれたのはいささか驚いた。だが中共に対する見方は好意的だ。



日本以上に資源の乏しいこの国が将来自立していくには貿易中継地として生きなければならぬとムッタナ君は言ったが、私はむしろ、今こそ中継輸送地として生きるべきであって、将来、航空輸送が発達した場合、貨物の中継地としての価値は減じると思う。

いずれにしてもこの国の前途はかなりけわしい。今日独立こそ勝得たが、国内的にもイギリス軍の急激な撤退はすでに失業者の増大という形で厳しい問題を投げかけて来た。加えて、スエズ運河の閉鎖による寄港船の減少から経済的にも危機に頻しており、政治的にもNLFとFLOSYの対立等々アデンは内外に多くの問題をかかえている。イギリスは、表面的には、アデンを劣等国にはしておかなかった。回教の奇妙な風習こそ残されているが、道行く人々の身なりもとりたてて貧相には見えないし、アデンには学校も数多くあった。市の建築構造上も、ややせせこましい感じこそ与えるが、決して旧時代的でない。唯それはそれとして国造りの過程で「仏作って魂入れず」の感は免れない。もとより統治国が撤退を前提にして属国の建設に精魂をこめるとは考えられないが、経済的にアデンをこれまでうまく統治していただけに、独立した現在、立派な石油施設も生かされずこのほか人材の無いのがめにつく。肝心なところに人材を欠くことになった。もちろん私が感じたこれらの点は賢明なムッタナ君を含めて私の知合ったアデンの人々は充分に心得ていたように見受けられ、それなりに彼等の強い決意も知

った。それはひたむきな愛国心と呼んでも良いだろう。NLF、FLOSYのいずれを選ぶかはアデン住民の意志だ。いずれにしろ彼等自身を選択しなければならぬ。そして事実全住民の意志を統一しなければ、この国は立ち行かなくなるであろう。私はムッタナ君が熱をこめて語るその口調にこの国の将来を想う若者らしい一途なものをみた。素晴らしいと思う。この情勢でもってこの国が、祖国の真の独立を目指し、内部的に統一をして力を併せたなら、あのイギリスを狼狽させた民族の力は、必らずや一人立ちを可能にするであろう。



にぎやかなアンマンの中心街

私は帰途またまた厳しい検問を経て、機上の人となった。私の想いは、一足飛びにベトナムへ飛ぶ。アデンで強く感じた反英感情は、これまでイギリスの血のかよわぬ政策がもたらしたもののだが、今ベトナムで力で押しまくっているアメリカに近い将来、このイギリスと同じテツを踏むことになるのではないかと考えると、多少の同情とあわれみを感じざるを得なかった。

◎一月足らずのかけ足旅行だったが当初私が狙った以上の成果を得ることが出来た。訪れた七ヶ国を通して感じたのは、人の心に共通するものがあるということだ。私が接した限り、皆本当に良い人ばかりだった。私は彼等と知りあい食事に招かれ、一夜の宿も提供された。私自身行動的な服装で現地で歌やダンスを教えたり、出来るだけ彼等と接触を保つように務めた。

全てが私の貴重な体験となったが、私自身戒しめなければならぬと感じたことがある。それは、昨年ジャカルタ(インドネシア)で時計を強奪された苦い体験が頭にこびりついているのだ。その時私は、これは貧困のもたらした災いだと結論づけたのだが、逆に貧しいところでは、絶えずそういう危険にさらされる、その地の人にも注意せよと自然納得するようになっていた。これは明らかに人間不信を意味する。それが、自分自身の胸にしまっているうちはまだ良い。私は、つい口をすべらせてしまった。ヨルダンへ入る前、貧しいヨルダンのことを話した後でつい盗難の危険性をパキスタンのさる紳



士に話したのだ。その人は私にコーヒーをおごってくれた上さとするに「どこでも国民は皆良い人ばかりです。中には危険な人も居るが、それは東京だって同じでしょう」と言われ、恥ずかしかった。そして、事実この人の言うように良い人たちばかりだった。良い教訓となった。また私の訪れた国は、何処も失業者のあふれた国だの、それでいて彼等国民の表情は、概して明るい。こういうところに日本人よりはるかに線の太さを感じた。ただ私が日本人である点に誇らしさを感じたのは、各地で日本製品を見たといった俗物的なことではなく、法的に日本が軍備を持たず、如何なる国にも軍隊を派遣していないということだ。彼の地の人々の、広島や長崎に対する関心は相当なもので、その悲惨な戦禍のために日本は戦争を放棄したのだと解釈しており、原爆を直ちに戦争反対へ結びつける一つの国際的世論を示してくれた。そういう点では、今日むしろわれわれ日本人は、そういう純粋な人々の意向をなしくずし的にゆがめ、隠蔽するきらいがあり、胸を張って今日の日本の外交姿勢を彼等に話してやる勇氣を持ち得ない点を残念に思う。

中東情勢は依然、淀みの中にある。私が危惧するベトナムの反米感情は、旧正月のベトコンの大攻勢以来除々に高まってきている。『陽気なアメリカ人よ。素朴な国民のうらみを買うようなことになっては、いまに世界各地から尻尾をまいて退却することになるだろうよ』アデンで私が一番強く感じたことである。